

# 哲學研究

第一百六十號

第十四卷  
第七册

## シエリングの哲學的方法

赤松元通

### 五

シエリングの思想發展に於ける第一期は上述の如く、年代にすれば凡そ一七九五年頃までを包括するのであるが、第二期はそれ以後より九八年頃までを包括してゐる。此の期に初めて自然哲學が現はれたのであるが、然し後に考察する様に此の期の自然哲學は次の時期（一七九九年以後の）それが著しく思辨的、而形上學的であるに對して、大いに批判論的認識的傾向に富み、實證的ポジチブな現實、もしくは經驗的事實を重視してゐる事の特徴としてゐる。此の點より此の時期を先驗的實證論 *Transzendental fundierter Positivismus* \* 或は批判的經驗論と呼ぶ事も出来るであらう。

\* Metzger, op. cit., s. 10, 46,

従つて此の期の一般の特徴としては、無限なる一者よりも有限なる個物に關心を有し、かゝる個物を自我とは何等かの意味に於いて獨立なる自然として、批判論的、認識論的立場より研究せんとした事、一言にて云へば思辨より經驗へ方向を轉じた事、従つて又一般性に對して個性を重視せんとした事、此れに關聯して直觀を重視する傾向が最頂點に達したといふ事等を擧げる事が出来る。

此れらの點より見て此の時期は大體第一期の反對の方向へ進んだと考へる事が出来、そして此れらの思想は又次の時期もしくはそれ以後に於いて綜合されて一つの新しい思想に取り入れられるのであるが故に、此の第二期は大體に於いてシエリングの思想發展の辨證法に於ける反立 *Antithese* をなしてゐると考へる事が出来る。

此の時期の最初の作としては *Abhandlungen zur Erläuterung des Idealismus der Wissenschaftslehre*,\* 1797, であるが、此れはシエリング自身\*「哲學的書簡」と並べて「哲學的書簡」よりもより多く積極的意見への萌芽が含まれてゐる」と注意してゐる如く、或る意味に於いて「哲學的書簡」の發展と考へる事が出来る。既に「哲學的書簡」に於いて現實經驗への衝動があり、此れによつて第二期の經驗重視の思想への移り行きとしての意義を見

出すことが出来ると思ふ。元來此の時期は *Waiseele* にしろ、*Ideen* にしろ、自然としての意義を有すると思ふ。元來此の時期は *Waiseele* にしろ、*Ideen* にしろ、自然そのものを研究せし時代として特徴づける事が出来るのであるが、此の *Abhandlungen* は尙ほ大體に於いて認識論的問題を取り扱つて居り、従つて自然研究への一般の方針を定め、その具體的なる研究に入る準備を供給すると云ふ役目を有してゐるものと考えられる。そして *Ideen* 以後の自然哲學に於いてどうかはされる思想は大體に於て此の *Abhandlungen* に於いて示されてゐたもので、自然哲學は云はゞ此の *Abhandlungen* に於いて捕捉された思想の具體化もしくは特殊的自然研究への適用と考へる事が出来る。

\* 元來此の *Abhandlungen* は最初 *Allgemeine Übersicht der neuesten phil. Literatur* なる表題にて *phil. Journal* に掲載せられたる一聯の論文であるが、此れらの大部分が一八〇九年に彼の著作集が編纂せられる時に上述の名の下に一つにまとめられ、そして他のものは元の表題のまま、著作集の中に收められたのである。

\* 一八〇九年に編纂せられたる彼の著作集の序文

此の *Abhandlungen* は此れらの自然哲學に對してのみならず、尙ほ次の時期のそれ、殊に *System des transszendentalen Idealismus* に對してその最も基礎的なる骨格として取り入れられてゐる事も明かに看取する事が出来る。

扱て此の第二期は上述の如く大體に於いて批判論的立場による認識論的研究が中心になつてゐるのであるが、然し此處に尙ほ一つの傍系もしくは傍流を認める事が出来る。それは批判的觀念論の中心要求なる實踐的要求である。此の傾向は第一期の初めには尙ほ餘り現はれてはゐなかつたが、\* 然し「哲學的書簡」に於いて漸く此れが高まり\*\* として實踐的問題を主題とする *Neue Deduktion des Naturrechts*, 1796, の著作となつたのであるが、此の *Abhandlungen* に於いては上述の如く認識論的傾向が強まつて來た爲めに實踐的問題への傾向は反對に弱められて以後暫らくは思索の前景に現はれて來なかつたのである。

\* 尤も全く無かつたのではない、例へば本體論的な *Vom Ich* に於いても、カッシーラーも云ふ如く後期の *Ontologismus* を異つて倫理的な色彩が認められるのである。(vgl. Cassirer, *Erkenntnisproblem*, III s. 219, Anmerkung)

\*\* 「哲學的書簡」をシェリングが書いた動機が、前書き及び一八〇九年の序文によれば神の存在の道徳的證明の眞の理解を明かにせんとする事にあつたのである。

要するにシェリングは此の第二期及び第一期より第二期への移行行きに於いて最もカント及びフイヒテの批判的觀念論の思想に接近したのであつて、移行行きの時期は主としてその實踐的、倫理的傾向を受け、第二期は主としてその認識論を受けついでゐると見る事が出来る。

扱て以下個々の問題について、もう少し詳しく考察して見やう。Abhandlungenに於いてシェリングが企てた所のものはカントに於いて初めて基礎をおかれ、そして、フイヒテによつてその核心を捕捉せられて更に深められた所の觀念論を純粹に徹底せんとする點にあつた。彼が極力争つた所のものは認識の一部を内より一部を外即ち物自體より來ると考へる所の當時の所謂カント學派と稱せられてゐる所の人々であつた。かくの如き不徹底な、二元的なる立場を取る限り、吾々は認識の根本問題たる對象と表象との絶對的一致を到底説明する事は出來ない。然し此の對象と表象、存在と認識との絶對的一致を説明すると云ふ事が吾々の問題なのである。吾々が對象を吾々以外の物として表象に對立せしめるや否や、吾々がかの問題を提出すると共に吾々は此の事をなすのである。兩者の間には決して直接なる一致が可能でない事は明かである。\*此れが可能なのは唯だ次の如き場合、即ち自分自身を直観するもの、従つて表象すると同時に而かも表象せられるものであり、直観者であつて而かも同時に被直観者であるものが存在する場合に於いてのみ可能である。此れの唯一の例を吾々は吾々自身の中に見出すのである。自分自身を唯獨り、直接に、そしてそれによつて始めて他のものを認識し理解するところのものは即ち吾々に

於ける自我である。自我は唯だ自分自身によつての外は識られないが故に、自我には自覺以外の賓辭は要求されない。精神の本質は實に自分自身に對して自分自身以外の賓辭を有せないといふ點にあるのである。唯だかくの如き自我或は精神の自己直觀に於いてのみ、吾々の全知識の實在性が基づいてゐる所の表象と對象との同一性があるのである。かくて觀念論の問題は精神は一般に客觀を直觀する事に於いて實は唯だ自己自身を直觀するのである、といふ事を明かにする事にある。\*\*\*

\* Schelling, S. W. I. S. 365

\*\* S. W. I. S. 366

此の事をシェリングは主觀と客觀、直觀者と、被直觀者との同一の立場より説明せんとするのである。先づ精神とは自分自身の客觀である所のもの、即ち自分自身に對してのみ客觀となる筈のものであつて決して本來客觀であるものではない、それに對して凡てが客觀である所の絶對的主觀である。又精神は決して靜止せるものではなく、その行動に於いてのみ捕捉せられ得るものである。即ちそれは永遠なる生成 Werden に外ならない。精神は唯自分自身によつて、彼自身の行動によつてのみ客觀となる (werden) ののである。扱て客觀(本來の)は必然的に又有限である。精神は

本來客觀ではないが故に、その本性上有限ではない。然し又精神は自分自身に對して客觀となる、即ち有限となる事によつて始めて精神であり得るのである。即ちそれは有限となることなしには無限ではなく、又無限であることなしには有限となることも出来ない。かくて精神は無限でも有限でもなくして、むしろ兩者の根源的な合一と考へる事が出来る。此の事は自覺——これによつて始めて精神が精神たり得るのである——の可能性から必然的に歸結せられることである。

更に精神は自分自身によつてのみ、即ち彼れの行動によつてのみ凡てあるが故に、彼れには必然的に相對立する行動が——一方は無限なる、他方は有限なる——なければならぬ。然し兩者は唯だ相互的關係に於いてのみ互に區別せられるのである。此の二つの反對なる活動は私に於いて根源的に合一してゐる。此の事を然し吾々は兩者を一つの行動に於いて總括することによつて知るのであるが、此の行動が直觀と呼ばれるのである。意識は直觀そのものと共には尙ほ生じないが、然し直觀がなければ意識も不可能である。吾々は意識に於いて始めてかの二つの活動を區別する——一方を積極的なもの、ある範圍を充たすもの、他方を消極的なもの、ある範圍を限るものとして、前者を「外へ」後者を「内へ」の活動として。然し精神は本來此

の同時に活動並びに制限であるものである。精神は自分自身を制限する事によつて同時に受動的で且つ能動的であるのである。直観も精神の働きである限り勿論能動と受動とを包括する。従つて直観の對象は能動及び受動に於ける精神そのものに外ならないが、然し直観そのものとしては、換言すれば精神が直観することに於いては、それは尙ほ同時に、自らを自らより區別する事は出来ない。従つて直観に於いては對象と表象との絶對的同一がある。故に表象と對象とを區別せんとすれば吾々は直観より出なければならぬ。此の事は吾々が直観の所産より抽象する事によつて可能である。——此れが爲めには吾々は勿論、元來自由でなければならぬ、何となれば抽象は自由を豫想するからである。扱て此の抽象によつて始めて吾々の行動の所産が客觀となるのである。意識は私の自由なる行動によつて、ある客觀がそれに對立する限りに於いて、始めて成立するのである。かくて客觀の意識は自由の意識なしには存せず、又自由の意識は客觀の意識なしには存しない。扱て抽象する事によつて概念が生ずるが、然し吾々は同時に意識を以つて直観することなしには抽象し得ないが故に、吾々は概念を唯だ直観に對立して又直観を唯だ概念に對立してのみ意識するのである。本來は、即ち意識以前に於いては然し兩者は同一であ



る。單に意識の立場に立つならば吾々の知識は一部は「ideal」——即ちそれ例へば、直觀の素材の如きもの)について吾々が必然的なる強制を感じるが故に——で、一部は「real」——即ちそれ(直觀の形式)もしくは範疇の如きもの)について吾々が自由と感ずるが故に——であると主張しなければならぬであらうが、然し本來は精神の行動の仕方 Handlungsweise と、此の行動の仕方(所産)とは同一である。然し吾々は此れらを互に對立せしめるに非ざれば、その各を意識する事は出来ない。かくて所産から抽象せられたる行動の仕方ば純形式的、行動の仕方より抽象せられたる所産は純質料的なものとして考へられる。されば形式も質料も元來同一のものであるにも拘らず、兩者が絶對的に峻別されて形式は吾々自身より來るが質料は外より與へられるとの主張が生ずるのである。

## 六

扱て此の Abhandlungen に於いて見出される重要な方法論的特質は先づ體系、從つて又原理に於いて著しく動的傾向を帯び來り、明かに生成的方法を取るに至つたことである。第一期に於いては絶對者は尙ほ靜的であつて「哲學的書簡」に於いての如く理想への無限なる努力が強調せられたる場合に於いても、無限者としての絶對者

そのものは尙ほ靜的と考へられてゐたのである。然し乍ら此の Abhandlungen に於いては絶對者自身も明かに生成的 *genetisch* である事が説かれてゐる。精神即ち自我、絶對者とは唯だ自分自身の客觀である所のもの、即ち自分自身に對して客觀ではあるが、然しその限りに於いて根源的に客觀ではなく絶對的な主觀である。客觀は死せるもの、靜止せるものであり決してそれ自身行動をなし得るものではない。單に行動の對象であるにすぎない。精神は然しその行動に於いてのみ捕捉せられうるのである。精神は従つて唯生成ウエルデに於いてのみあり、或はむしろ永遠なる生成以外の何物でもない。かくて死せる *Materie* より生ける自然の理念までへの吾々の知識の進展も理解せられうる。精神は自分自身に對して客觀である (*sein*) のではなく、客觀となる (*werden*) べきものである。それは自分自身によつてのみ、彼自身の行動によつてのみ客觀となるのである。凡ての哲學は死せる物質、根源的な客觀から始まるべきではなく、唯々行動 (*Tat und Handlung*) と共に始まるべきものである。

かくの如く客觀或は自然は本來主觀或は精神に對立するものではなく、精神自らがその根源的行動によつて生産したるものである。従つて此の限りに於いて自然と精神との同一性が想定せられる。無限なる世界は無限なる生産、再生産に於け

る吾々の創造的精神そのものに外ならない。(T. s. 360) かくて精神に於ける生成は又同時に自然に於ける生成でなければならぬ。Die äussere Welt liegt vor uns aufgeschlagen, um in ihr die Geschichte unseres Geistes wieder zu finden. 「外的世界は、それに於いて吾々の精神の歴史が再び見出されんが爲めに展開してゐるのである。」

精神の本質は自ら行動するのみならず、此の行動を自覺する點にある。tote Materieより lebendige Natur への發展も精神そのものゝ働きに外ならないが、此れらに於いては精神は尙ほ未だ自覺しない。此の自然に於ける自らの行動の自覺に於いて精神は始めて自らの本來の姿に還るのである。「凡ての此の(精神の)行動の目標は自覺である。そして此れらの行動の歴史は即ち自覺の歴史に外ならない。精神の各の行動は又精神の一定の状態である。従つて人間精神の歴史は種々の異なる状態——此の状態を通じて精神が漸次に彼自身の直観、純粹なる自覺に達する所の——の歴史に外ならぬ。」(T. s. 382)

此れらの考に於いてシェリングの自然哲學の方法論的なる根本思想が既に現はれてゐる。自然哲學の根本思想をクルノー、フイツシヤーは 1) Natur als Entwicklung des Geistes 精神の發展としての自然 2) Der Wille als Urkraft 根源力としての意志 3) ge-

netische Philosophie 生成的哲學の三つに總括してゐるが、此の中一には既に三の考が働いて居り、又自然即精神の思想も含まれてゐるが故に、大要一、二の二項にまどめる事が出来るであらう。一については既に述べたが、意志を根源力と考へる事は第一期に於いても勿論無くはなかつた。例へば「哲學的書簡」に於いても、「自我について」に於いても批判論の體系を自由の體系と考へ、哲學の最高の品位はそれが凡てのことを人間の自由から期待するといふ點に存する」と考へ又絶對者を知識の對象ではなく、行動の對象と考へ、<sup>3)</sup> 知識の體系に實在性を與へるのは決して理論的な、又認識する所の能力ではなくして實踐的な、生産的實現的能力であると考へる點に於いても、又は「凡ての哲學の最初にして最後のものは自由である。<sup>5)</sup>」「自我の本質は自由である。<sup>6)</sup>」「絶對的實體(自我)の原因性を表はす所の最高の理念は絶對的偉力の理念である。<sup>7)</sup>」等の言葉に於いても充分に察する事が出来るのである。

1) Vgl. K. Fischer, Schellings, s. 307 ff.

2) Schelling, S. W. I, s. 306

3) vgl. I, s. 333

4) 〃 I, s. 305

5) 〃 I, s. 177

6) ♪ I, s. 179

7) ♪ I, s. 195

然し乍ら第二期に至つて此の考は、更に明確に云ひ表はされてゐるのである。先づ Abhandlungen に於いても精神の働きは唯々自らを限定するのみであるが、精神の自己限定は意欲ワツツレンと呼ばれるのである。精神が意欲するといふ事に對してはそれ以上の根據は與へられない。此の行動が絶對的シュレヒトに起ると云ふ事の故にそれは意欲である。精神が自らを直接に意識すると云ふ事は精神が自らを客觀から引き離すと云ふ事によつて始めて可能であるが、然し此の事は精神が絶對的に行動するといふ事の外は起り得ない。絶對的に行動するといふ事は即ち意欲するといふことである。従つて精神は唯だ意欲に於いて彼の行動を直接に意識する。自覺の源は意欲である。此の絶對的意欲に於いて精神は直接に彼自身を意識する、或は彼自身の知的直觀を持つ、といふ認識は全く媒介されざるが故に直觀であり、又それは凡ゆる經驗的なるものを超え、そして概念によつても決して到達せられないが故に知的である。(I, s. 401) かくの如く意欲の作用は實に自覺の最高の制約であり、精神は根源的な意欲である。「精神はそれが意欲することによつてのみ在り、そしてそれが自ら

を限定する事によつてのみ自分自身を識るのである。」(I, s. 395)

然し此の意欲を根本力と見る點に、知識の體系を支配する所の原理の二元性が現はれてゐる。何となれば意欲は常に自らに對するもの、それが突破すべき障害を豫想するが故である。然し又實に此の二元性の故に發展があり、生成があるのである。「吾々の意欲の自由のみが吾々の表象の全體系を擔へる所のものにして、世界そのものは唯だ精神の此の Expansion 膨脹と Contraction 收縮に於いて成立する。」(I, s. 396) のである。

## 七

此の Abhandlungen に於いては具體的なる現實を重視し、従つて抽象的なる概念もしくは反省よりも直觀を重視する傾向が著しい事を既に指摘しておいたが、此のことは彼れが第一の論文に於けるカントの認識論の批評に先づ現はれてゐる。

カントは、吾々の認識に於ける第一のものは直觀であるといふ事から出發した。

此のことからやがて直觀は認識の最低の段階であるといふ命題が成立する。然し乍ら直觀は人間精神に於ける最高のものである。吾々の凡ての他の認識は、それ(直觀)からその價值と實在性とを初めて得る所のものである。\*……悟性は、直觀及びそ

れと共に、その實在性が消失した後、原直観——それに於いて客観が最初にあつた所の——のかの根源的なる行動を唯だ模寫し、反覆し——此の爲めには構想力が要る。而かも此れによつて反覆されるのは直観の形式的なるもの、即ち時間空間に於いて與へられたる對象の輪廓だけにすぎない。此れが圖型である。——得るのみである。然し實在は唯だ直観の中にのみ存する。構想力によつて感性化されない所の概念は意味なき言葉、意義なき響 ein Wort ohne Sinn, ein Schall ohne Bedeutung \*\* である。

\* I, s. 355

\*\* I, s. 359

「自然哲學の理念」Ideen zu einer Philosophie der Natur, 1797, に於つても (II, s. 223)「何故に直観は——多くの自稱哲學者が考へる様に——認識の最低の段階ではなくして、人間精神に於ける最初の、最高の段階、精神をして眞に精神たらしめる所のものであるかといふ事が以上のことから明かとなる。……」と述べてゐる。即ち直観こそ根源的なる存在であつて、悟性もしくは「概念は現實の單に影にすぎない。」悟性は現實が既に存在する時に現はれ來るのであり、それは創造的なる能力が産出することが出來た所のものを、單に捕捉し、理解し、固定するにすぎない。概念に歸し得る所の實

在性は凡て皆それに先立つ所の直観がそれに與へるのである。(vgl. II, s. 215) 概念は單に模倣せられたる直観にすぎない。(I, s. 303) 従つてそれは直観を離れては無であり、直観と合一すべきものである。

此の思想は更に理論哲學と實踐哲學との合一、或は自然より自由への移り行きを問題としてゐる所の第三の論文に於いても明かに見ることが出来る。「吾々の知識の凡ての確實性は直観の直接性に基づいてゐる。」(I, s. 376) 而して此の直接性と云ふのは直観に於ける對象と表象とのかの根源的同一性に外ならない。實に此の根源的なる同一性は凡ゆる反省的思惟を超越せるもので、根源的なる現實そのもの考へられる。「凡ての思惟及推論は、然し既に、吾々が考へ出したのでもなく又推理したのでもなき現實を豫想してゐる。」(I, s. 325) 直接なる現實は單なる一般的なものではなく、むしろ特殊的なる、個性的なるものと考へられる。前の時期に於いてはその思索の焦點は無限的の一者であつたと云ひ得るが、此の期に於いては個別的特殊的現實に考察の眼が向けられ始めたと見ることが出来る。然し乍ら勿論此の場合とても全然絶對者が彼の思索より消失したと見る事は出来ない。今迄は無限なる普遍者が絶對者であつたが、此處に於いては現實的なる精神の體驗が、個性的なる自我



が絶對者となつたと見ることが出来る。或は絶對者そのものゝ内容に於いて個性の特殊の現實的なる方面が自覺されて來たと考へる事が出来る。従つて同じく自我といふ概念が用ひられてゐるにしても、第一期殊に Vom Ich に於ける自我と此の期に於ける自我とは明かなる相違を有すると思ふ。此の期に於ける自我は(もしくは精神は)も早や單に普遍的な無限なる自我ではなく、個性的なる自我である。「有限性と無限性とは、然し唯だ精神の(精神的自然)存在の中に根源的に合一せられてゐる。無限なるものと有限なるものと此の絶對的同時性に個性的なるもの (individuelle Natur) (自我性)の本質が存する。」(I, s. 368f.) 「精神は自分自身を制限する事によつて能動的であると同時に受動的である。そしてかの行動なしには又吾々の本性の意識もないが故に、能動と受動とのかの絶對的合一は個性的なるものゝ特質であらねばならぬ……」(I, s. 369)

即ち精神は單なる無限者ではなくして、有限と無限との合一であり、「精神の凡ての行動は有限の中に無限を表現せんとすることに向けられてゐる」のである。(I, s. 369) かくて又物が眞に存在するといふのも單に一般的なる關係に於いて、例へば概念的關係に於いてあると云ふ如きことではなく、特殊なる個性の相に於いて存在

することゝ考へられる。個性的なる存在が眞の意味に於ける存在である。「凡て存在する(此の言葉の本來の意味に於いて)ものは唯だ自分自身への方向に於いて」(H. s. 369) 従つて個性によつて「存在するのである」。「有限なるものゝ存在は原因及結果の概念によつては決して説明することは出来ない。此の命題の洞察と共に始めて凡ての哲學は始まるのである……」(H. s. 368)

又他の論文 \* に於いてはかくの如き思想を生成的方法と結びつけて次の如く述べてゐる。哲學の客觀は現實的世界である。決して抽象的な概念ではない。かくて哲學と經驗とは、その客觀に關して一見對立はしない様に思はれる。然し兩者はその客觀の同一にも拘らず、その客觀の反對なる見方(アウシヒト)によつて區別せられる。即ち經驗はその客觀を例へばその存在(ザイン)に於いて、哲學はその根源的なる生成(ウエルデン)に於いて考察するのである。云々

\* Allgemeine Übersicht, B. III, I, s. 465

此の哲學の方法を規定する所の「根源的生成に於いて考察する」といふ事については、此の個所に於いてはそれ以上の説明はなされてゐないが、他の個所に於いて述べられたる思想などより見て、既に述べた如く單なる經驗的生成に於いては、先

驗的なる意味に於ける生成に於いて、即ち客觀が如何にして主觀即ち無制約的なる  
 絶對者より産出されるか、の先驗的なる過程を明かにすること、自然哲學に於いては  
 自然が絶對者なる精神より如何にして生産されるかといふ事、精神哲學(知識學、先驗  
 哲學)に於いては精神そのものが絶對者としての精神より如何にして生産されるか  
 といふ事、換言すれば自然そのものも成程無意識的、無自覺的にであるとは云へ、精神  
 の働きに外ならないが故に、哲學の課題は精神がそれの無自覺なる状態より、幾多の  
 段階を経て、漸次高まりつゝ、最高の自覺の状態に至る過程を明かにするにあると云  
 ふ事が出来るであらう。そして此の云はゞ先驗生成的方法の對象は精神或は自我  
 が自らを客觀化する過程であり、そして低き段階に於いては主觀であつた所のもの  
 を、更に自らの客觀とすることによつて精神は更に高き段階に高まり、かくて遂に精  
 神の最高の自覺に達するのであるが故に、此の方法は又精神の自己客觀化的方法、或  
 は略してシエリング自身が名づけた如く、單に客觀的方法と名づける事も出来るで  
 あらう。尤も此の名稱はシエリングの手稿に於いて「先驗的觀念論の體系に於いて  
 とられたる方法について語られたのであるが、然し今迄考察して來た如くに、先驗的  
 觀念論の體系」に於いて取られたる此の方法は既に *Abhandlungen* 並に *Allgemeine Übersicht*

に於いても、勿論徹底的ではないにしても、とにかく意識せられ又用ひられてゐるのであるが故に、此の場合此れを客觀的方法と呼ぶことは決して不當ではないであらう。

此の經驗的現實重視の傾向に關聯して興味あることはシェリングがやはり此の期に屬する *Ideen zu einer Phil. der Natur* の序論に於いて、初版に於いては *Spekulation, Spekuliren*——それも多くは *Bloss* なる形容詞が冠せられてゐる——と云つた所を後の版に於いては *Reflexion, reflektiren* を書き代へてゐる點である。*Spekulation* に對立する概念は *Erfahrung* であり、*Reflexion* に對立する概念は *Vernunft*、而かも *spekulative Vernunft* であるを考へられる。最初には具體的なる經驗に對して抽象的なる反省的思惟の意味に於いて *spekulation* なる概念が用ひられたと思はれるが、次の時期以後に於いては又合理的傾向、思辨的な理性重視の傾向が高まると共に *Spekulation* なる概念は具體的なる理性作用に對して保留せられて、前に *Spekulation* に於いて意味せられたる抽象的反省は *Reflexion* なる概念によつて表はされるに至つたものと考へられる。

## 八

扱て此の客觀的方法こそシェリング哲學に於いて最も重視すべきものと考へられる。然し此の方法は「先驗的觀念論の體系」に於いて初めて明確に意識せられて開展せられたと見ることが出来るが故に、此れの詳細なる研究はその期にゆづり、今は唯だ此れらの論文に於いて暗示せられたる輪廓を辿りつゝ、その意味及び由來を簡單に考察するのみに止めたいと思ふ。

彼は「自然哲學の理念」に於いて、自然哲學の課題を、自然と精神との絶對的同一の豫想のもとに、換言すれば所謂自然は可視的精神、所謂精神は不可視的自然 Die Natur soll der sichtbare Geist, der Geist die unsichtbare Natur sein. (II, s. 36) と考へる事によつて、自然の可能性を、即ち全經驗界の可能性を原理より導出することにとありと考へた。かくて物質 materie の演繹が自然哲學に於いて最初の根本的なる問題となつた。然し精神よりの此の Materie の演繹はシェリングによれば勿論經驗的なる演繹ではなくして先驗的解明 transzendente Erörterung でなければならぬ。(II, s. 214) 此の先驗的解明に於いても二つの途が考へられる。一つは分析的方法 analytisches Verfahren であり、他は綜合的方法 synthetisches Verfahren である。前者は materie そのものゝ概念を分析し、そして例へばそれは一般に空間を、然しある制限のもとに於いて充たすものと考へられねばならぬ、従つて吾々はそれの可能の制約として、空間を充たす力と、それに對立して空間に限界と制限とを與へる所の力とを豫想しなければならぬ、といふ事を示すのである。此の方法は然し、凡ての分析的方法と同様に、その概念が元來持つてゐる所の必然性が消失し易く、又その要素に分解し易きが爲めに、その概念そのものをも氣髓的な自ら作られたる概念として考察され易く、結局單なる論理的意義のみ

しか有しないものとなり易いのである。此れに比すれば後者の途が遙かに安全である。此れはその概念を云はゞ眼前に成立せしめ、そしてその根源そのものに於いてその必然性の根據を見出さんとするのである。此れが爲めには、此の探究に於いて吾々が常に還り行く所の根本的原理が立てられねばならぬ。此の場合 *sub specie Materie* 無生命な物質なる概念の如きは問題ではない。かゝるものはむしろ吾々が漸次に自然の理念 *Idee einer Natur* に到達するに至る所の現實性の最初の段階にすぎない。かくてシエリングは根源的なる直觀に於ける、自由なる根源的活動とそれに對立する活動との根源的なる相互作用より漸次に高次の所産を、抽象的なるものより具體的なるものへと成立せしめ、自然の理念を演繹せんとしたのである。かくて此の綜合的方法是は精神或は自覺の内面的作用より云はゞ *Materie* を綜合的に構成しつつ、その根源よりの生成を明かにする方法と考へる事が出来る。従つてシエリングが此處に *Materie* の先驗的解明の方法として考へた綜合的方法是は、取りも直さず今迄考へて來た先驗生成的方法に外ならないと思はれる。即ち先驗生成的方法の自然哲學への適用と考へることが出来る。分析的方法の缺點は體驗もしくは直觀との關係を顧みることなしに、單なる概念の分析よりその制約を見出さんとする

が爲めに、その概念の眞の實在性が見失はれる恐れがあることである。單に抽象的なるものと考へられ、その限りに於いて氣髓的なものとさへ考へられる點である。従つて此の方法の缺點を補はんとすればその概念の直觀との結びつきを何らかの方法によつて明かにしなければならぬと思はれる。綜合的方法、即ち先驗生成的方法も勿論分析的態度を全然要せぬと云ふのではない。綜合的に構成し得んが爲めには先づ構成の「モメント」たるものが明確にせられなければならぬ、即ち分析せられなければならぬからである。此の意味の分析と綜合とは必ず常に結びついてゐるものと考へられる。従つて此處にシエリングが分析的方法と綜合的方法とを對立せしめたのは直觀、もしくは具體的な體驗との内的結合を顧みるか否かといふ點に於いてはなからうかと考へられる。

以上は自然哲學に於いて現はれたる思想であるが認識論的な問題を取り扱つてゐる *Abhandlungen* に於いても、眞の哲學は生成的方法をとらなければならぬことが可成り明瞭に説かれてゐる。「先驗哲學は凡ての客觀的なものを先づ最初、生じないものとして *als nicht vorhanden* 考へる事に於いて、それはその本性上、生成するもの、生命あるもの *das Werdende, das Lebendige* に向けられてゐる。何となれば先驗哲學はその

最初の原理に於いて生成的であり、そして精神はそれ先驗哲學の中に於いて、世界と共に生成し生長するからである。」(I, s. 403)

尙ほシェリングの哲學的方法に重要な關係を有するものとして要請 Postulat といふ概念がある。彼は此の概念を特に Abhandlungen の最後の附録に於いて説明し、尙ほ又後に(一八〇三年)他の哲學者の著作の批評として、はあるが Über die Konstruktion in der Philosophie「哲學に於ける構成について」に於いて此の問題に關係ある「構成」なる概念について述べてゐる。

哲學の根本原理は單に理論的なものでも、又單に實踐的なものでもなく、同時に兩者でなければならぬ。單に理論的な根本原理は存在ダウから出發する所の命題 Lehrsatz である。又單に實踐的な根本原理は命令 Imperativ でなければならぬ。實踐的な要請とは contradictio in adjecto である。理論的であつて而かも實踐的な要求を有する根本原理、此れは即ち要請でなければならぬ。例へば數學の如きものもその根本原理は要請と考へられる。要請の對象、即ちその要求する所のものは根源的構成 ursprüngliche Konstruktion である。數學の出發點は證明し得べき根本原理ではなくして、證明すべからざるもの、根源的に直觀せらるべきものでなければならぬ。かく



て數學の要請は直觀に於ける根源的なる構成といふ事になる。根源的といふのは、例へば吾々が普通に紙又はボードに描く線は直觀に於ける根源的なる線の構成の單なる手段にすぎない、それは線そのものではなくして、單にそのの形象ビルトにすぎないからである。哲學に於いても同じことが云ひ得る。唯だ數學と異なる點は、後者が外官に關係するに對し哲學は内官を對象とする點である。(F. 51) 哲學の根本原理としての要請は、それが根源的構成を要求する點に於いて理論的であり、又その内官に對する強制力は唯々實踐哲學よりのみ導出されうるといふ點に於いて實踐的であると考へられる。かくて哲學の原理は必然的に要請でなければならぬ。哲學の要請の對象は内官に對する根源的構成であるが、此の内官の對象とは一般に思惟作用表象作用意欲作用等に於ける自我である。従つて内官に對する根源的構成は、それによつて自我そのものが始めて成立する所のものでなければならぬ。従つて哲學の要請は又他の言葉で云へば、自らを根源的に——單に思惟作用や表象作用や意欲作用に於いては——ない——最初の成立に於いて *im ersten Entstehen* 直觀するといふ事である。此の根源的なる構成によつて、哲學者にとつて所産(自我)が生ずる。然し此の所産は此の構成以外に於いては何處にも現はれない。此れは丁度幾何學に

於いて、要請せられた線が根源的構成以外に於いては全く無であるのと同様である。唯だ哲學の場合に於いては、自我は單なる線とことなり根源的行動に於いては、單に構成せられたるものであるのみならず、又構成するものである點である。此の事によつてそれは初めて直に自我即ち凡ての客觀的なるものを超越したる原理となるのである。線が何であるかを吾々は唯それを構成することによつて知るが如く、哲學に於いても吾々は自我を要請するが、自我が果たして何であるかはそれを構成することによつて始めて知り得るのである。自我が何であるかと云ふ問には諸君がそれを構成することによつて、自分自身で答へねばならぬ。何となれば要請とは實に根源的なる(先驗的なる)構成の要求を意味するからである。尙ほ *Über die Konstruktion in der Phil.* に於いては狹義の同一期の一般的背景のもとに、此の構成は知的直觀に於ける、もしくは絶對的無差別に於ける普遍と特殊との絶對的合一として考へられるに至つた。然し此の事については又後に考察しやうと思ふ。

最後に此の期に於いて明かにせられてゐる限りに於けるかくの如き、生成的方法が成立する爲めに豫想すべき必然的なる制約をさぐつて見やう。先づ第一には絶對者としての精神が發展的であると云ふ事、即ち精神そのもの、内面的なる制約が

二重性 Duplizität 即ち絶對的に自由なる作用とそれに反對なる作用との二重性であつて、これの相互制約によつて精神は永遠に發展し、活動するものと考へられる。

„Geist ist ewiges Werden.“ (I, s. 367) „Was die Seele anschaut, ist immer ihre eigne, entwickelnde Natur.“ Jene Eigenschaft der Seele also, wodurch sie (einer Selbst-anschauung, d.h.) einer unmittelbaren Erkenntnis fähig wird, ist die Duplizität ihrer Tendenz nach innen und aussen.“ 所謂自然も精神のかくの如き活動即ち發展に外ならない。自然と精神とは同一である。若し精神そのものが發展的でなく、産出的でないならば、即ち全く靜的、もしくは受動的であるならば、精神自らによる對象の根源的なる生成を明かにせんとする生成的方法そのものも勿論不可能となるであらう。

次に以上のことは又必然的に、精神は自らを直観するものであるといふ事、精神はその直観の對象として唯だ自らのみを有すると云ふことゝ結びついてゐる。精神は唯だ自らを直観することによつてよく自然を産み出すのである。精神はそれ自身發展的であると同時に、その發展、その所産を直観する。自らを、即ち自らの行動を直観する事の出來ないものは眞に精神と呼ぶことは出來ない。自ら働くと共に此の自らの働きを自らが直観すると云ふ點に又、自己客觀化的方法としての生成的方

法の特質が存すると思ふ。

此の精神の自己自身の直観、——此の働きの中に於ては勿論、觀るものと觀られるものとの絶對的同一、作用と所産との絶對的合一である所の、そして凡ゆる哲學の基礎とさへ考へらるべき所の知的直観が考へられてゐなければならぬことは明かである。此の絶對的無差別としての知的直観こそ更に次の時期、殊に一八〇一年、二年に於いて強調せられる所のものである。

## 九

既にのべた如くシエリングが第一期に於ける、何れかと云へば靜的なる、本體論的なる、そして又普遍重視の考方より此の第二期の發展的なる、生成的なる、そして又個性重視の考方に移り行つたこと、關聯して注意せられる事は、此の期に於いて彼れの哲學上の興味がスピノザよりも、むしろライブニッツへ移り行つたと見られる點である。彼は此處に於いて、久しく忘れられてゐたライブニッツを見出し、その眞價を認めんとした。彼は云ふ。「彼(ライブニッツ)の哲學が復興せられうる時が、今や來たのである。彼の精神は學派の桎梏を蔑視した。彼れが吾々の間に於いて、彼と精神を同じうせる極く僅かの人々の中に於いてのみ存續し、他の多くの人々の間に

於いては既に久しき以前に全く無關係なるものとなつたと云ふ事も決して怪しむに足りない?.....」(H.s. 20)

此處に於いてシェリングの此の兩者に對する批評は、それ自身勿論興味あるものであると共に、それによつてシェリング自身の思想の移り行きを暗示してゐるものとして、又別なる興味を有しうると思はれる。此の時期に於いても勿論スピノザに對する尊敬、彼に對する傾倒は決して變らないのであるが、有限なるもの、現實的なるものが思索の中心となるに従つて此れらを單に一般的なる、無限なる同一より説明することの困難が自覺されて、此れを補ふべき新しき原理が求められたのであると考へられる。シェリングは云ふ。スピノザは成程觀念的なるものと實在的なるもの、思惟と存在との同一を説き、そして吾々が外界事物の表象を有する事を吾々の觀念的本性 *ideale Natur* より説明することが出来たが、然し事物が表象に一致するといふ事を唯だ吾々に於ける觀念的なるものゝ感觸、規定 *affektionen, Bestimmungen* によつて説明しなければならなかつた。彼にあつては二つの世界は全く別れずに合一してゐる。即ち同一の觀念的本性の變様 *Modifikationen* に外ならない。スピノザは彼の自覺の深奥に沈下して、そこから吾々に於ける此の二つの世界の生成を説明せずし

て、むしろ自らを飛び越えてしまつた。如何に有限と無限とが根源的に吾々の中に合一してゐるか、相互に生ずるかを、彼は吾々の本性より説明せずして、直ちに吾々の外の無限者の理念の中に自らを没して了つた。此の無限なるものに於て、*affektion*, *Modifikation*, ————そして此れらと共に有限なる事物の無限なる系列が成立———否むしろ本来あつたのである。従つて此れらが何處から來たのか吾々は知る由もないのである。何となれば彼の體系に於いては無限から有限への移り行きはないが故に、生成の起始は存在のそれと同様に全く不可解であるからである。成程彼によれば表象の繼起の必然性は、物と私の表象の根源的同一より出で來るが、然し自我そのものが單に此の表象のある連續的繼起にすぎないが故に、スピノザは如何にして私に此の表象の繼起を意識するかと云ふ事を明かにする事は出來なかつた。(V. II, s. 33ff.)

かくの如くスピノザは餘りに無限なるものを重視し、そして此れの有限なるものへの移り行きを否定したが爲めに、有限なるものゝ説明が不可能とならざるを得なかつたのみならず、更に大切なる點は彼が無限者を吾々の外に求めたと云ふことである。然し吾々は直接には唯だ吾々自身の本性を知りうるのみである。吾々の中

に同時に有限なるものがあることなしには、無限なるものはあり得ないと云ふ事を吾々は直接に知る。然し吾々の外の絶対者を吾々は知らない。觀念的と實在的とのかの必然的なる結合は唯私の中にのみあるのである。ライブニッツは實に此の方向に向つて進んだ。そして此の點がスピノザとライブニッツとの異なる點であり、此の點を明確に把握せずしては、ライブニッツを理解することは出来ない。ライブニッツの體系は個性の概念より出發し、個性の概念に還るといはれるが、此の個性の概念にこそ、凡ての他の哲學が分けてゐる所の、吾々の本性の積極的なるものと消極的なるもの、能動的なるものと受動的なるものとが根源的に合一してゐる。否此の合一がむしろ個性の本質であると云ひ得る。ライブニッツは従つて無限から有限へも、有限から無限へも移り行つたのではなくして、彼にとつてはむしろ兩者は同時に、云はゞ吾々の本性の同一の發展によつて、精神の同一の行動の仕方によつて、現實にせられたのである。従つて哲學は吾々の精神の本性論に外ならず、そしてそれは個性的なる、發展的なるものなるが故に、必然的に生成的ゲネチツェなものとならねばならぬ。(vgl. II, s. 39) のである。

以上述べた所によつても明かなる如く此の期のシエリングの思想はカント、\*フ

イヒテ、スピノザ等に對してのみならず、ライブニッツに對しても可成り密接なる内面的關係のあることを認めらると思ふのである。

\* シエリングが此の期に於いてカント、フイヒテの概念論に對して最も接近したさいふ事は既に一般的に指示しておいたが、更に個々の問題、例へば自然の合目的性についても、此の期に於いては尙ほ、カントの反省的判斷力に對する統整的原理レグラチーベスプリンチプなる思想を大體に於いて踏襲してゐるを考へらる。(Vgl. II, S. 54)

## 一〇

經驗的なるもの、現實的なるものゝ特有なる實在性を重んじ、それらをその個性的なる姿に於いて捕捉せんと努めた此の期の彼のの方法は成程或る意味に於いて實證論(vgl. Metzger, op. cit., s. 46)もしくは經驗論と呼ぶことも出来るであらうが、然し決して單なる實證論又は經驗論ではない。メツツガーも「先驗的に基礎づけられた」と云つてゐる如く、成程根源的なる直接的なる直觀を哲學の缺くべからざる豫想出發點として認めたのであるが、然し一方に於いてはあくまでも合理的要求を棄てず、先驗的な立場に立ちつゝ合理的構成もしくは綜合を徹底的に遂行せんとしてゐるのである。哲學を常に數學と比較し(vgl. über Postulat der Phil. do. allgemeine Übersicht B)てゐる點に於いても、或は又數學の如き絶對的確實性は唯々その對象の觀念性に



あるが故に、一般に凡ての他の學問にもかくの如き確實性が與へられんが爲めには數學の方法を一般化することが考へられる——尤も此の事はシエリングも注意してゐる如く數學的方法の單に外的形式のみに關するのではなく、むしろその精神に關すると考ふべきである。——などと述べてゐる點に於いても、哲學に於ける合理的傾向を示してゐると見ることが出来るが、更に哲學をアプリアリなる學、歴史哲學をアプリアリなる歴史の學 (I, S. 473) と見てゐる所によつても此の事は推察することが出来る。かくの如き強きアプリアリなる傾向、合理的要求と、特に此の期に於ける現實重視の傾向の方法論上の交錯、背乖の最も著しい、そして最も興味ある所産として、吾々はかの *allgemeine Übersicht B* に於ける歴史哲學否定論を擧げる事が出来ると思ふ。

彼によれば歴史哲學なる概念はそれ自身矛盾を含んでゐる。換言すれば歴史なる概念と哲學なる概念とは結びつき得ない概念であるのである。歴史とは語源上から云つても出來事の知識 *Kenntnis des Geschehenen* であり、従つてその對象は決して *ダスライベンド* 留まるもの、*バルレビデ* 持續するものではなく、*ダスアンメルデ* 移り變はるもの、時間 に於いて *フォールトシユラユンデ* 進歩するものではない。即ち一進歩的 *progressiv* でないものは決して歴史の對象とは考へら

れない。然し週期的に、規則的に繰り返へされる如きものも、眞に進歩的ではなく、歴史の中に數へらるべきではない。又進化、例へば動物或は自然物の、個物の又は種屬の進化の如きものも歴史とは考へられない。此れらが歴史即自然史と見做されるのは、吾々が此の場合自然を自由の中に、即ち無法則性——此の場合の法則は勿論アプリオリなる自然法則を意味すると考へられる——の中に眺めるからである。即ち一般に歴史が考へられる爲めには、先づある理想と、及び個別的なものに於ける、それ(理想)よりの無限に多様なる背離と、それにも拘らず全體に於けるそれとの完全なる一致がなければならぬ。従つて此の背後には必ず人類を自由を有するものとして、又一つの全體として考へると云ふ事が必要である。二、次に機械制 Mechanismus のある所には歴史はない。反對に又歴史のある所には機械制がない。機械制に於いては全く自由はなく、凡て規則的に活動する。時計の活動に歴史がない如く機械制の活動はむしろ歴史とは正反對である。三、従つてアプリオリな理論が可能である所のものについては歴史は可能ではない。反對にアプリオリな理論を持たない所のものゝみが歴史を有するのである。従つて背理的な言ひ表はしが許されるならば、若し人間が歴史(アポステリオリな)を持つとするならば、それは彼れが歴史(アプ

オリな)を持たないが故にのみそうである。一言にて云へば人間は歴史を持つて來る *nichtigen* のではなくして、彼が自ら産出するが故にのみ歴史を持つのである。かくて吾々のアプリアオリな知識の限界が擴げられ、ば擴げられるだけ、歴史の限界は狹まるのである。即ち歴史的な知識の範圍と本來の知識の範圍とは全く反比例をなすと考へられるのである。従つて人間は歴史を、唯だそれがアプリアオリに規定せられない限りに於いてのみ持つことが出来るならば、此の事よりアプリアオリな歴史と云ふ事はそれ自らに於いて矛盾してゐるといふ事が導き出される。そして若し歴史哲學がアプリアオリなる歴史の學といふ意味であるならば歴史哲學は明かに不可能であると云はなければならぬ。

此れを要するに彼は歴史をアプリアオリに演繹するデデューゼンことこの不可能さを明かにしたのである。歴史は個性的なアポステリオリなもの、偶然的なものでなければならぬ。然し果たしてかくの如き歴史に對しては、如何なる意味に於いても哲學は結びつき得ないものであらうか。成程シエリングが此處に考へた如きアプリアオリに *deduzieren* する學としての哲學がかくの如き歴史に結びつき得ない事は確かに承認し得る。然し乍ら若しアプリアオリに *deduzieren* するのではなくして、現實的なる、個性的なる歴

史的體驗の祕奥に没入しつゝ、かゝる歴史的發展の意義をさぐり、その內的關聯を明かにし得る如き哲學が存し得るならば、これこそ實に求められたる歴史と哲學との眞の內的結合と考へられないであらうか。そしてかくの如き哲學をシエリング自身、彼の後期に於いて見出したのではなからうか。吾々は此れらの問題に關する更に深き研究をシエリング後期の哲學の研究の際にゆづりたいと思ふ。(未完)